

STATEMENTS 214 2019



行動するシンクタンク
一般財団法人 下関21世紀協会
Shimonoseki 21st Century Association

思索の人として行動し、行動の人として思索せよ
アンリ・ベルクソン (Henri Bergson) [1859 ~ 1941] フランスの哲学者

ふるさと下関を次世代へ

一般財団法人下関21世紀協会 会員 吉田 真次

新たな元号が「令和」と発表されました。万葉集から引用されたこの言葉は、「人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ」という意味が込められています。

日本には長い歴史と伝統、そこから醸し出された類まれなる文化があります。私たちの住む下関も、表に出ているものや未だに眠っている多くの貴重な財産が存在します。

現在、私たちが享受しているふるさとの発展は、先人たちが額に汗し、たゆまぬ努力を重ねてきた、その土台の上に成り立っているということを今一度、深く認識しなければなりません。

さて「富士山に登ったことのある人はどういう人だと思いますか」という質問に、皆さんはどのように答えるでしょうか。登山家、山が好きな人、観光客などいろいろな人が思い浮かぶのではないかと思います。しかしながら、全てに共通しているのは「富士山に登ろうという【志】を立てた人」です。まずは志を立て、それに向かってあらゆる努力を重ねていくということは、様々な面で複雑化、多様化し、街そのものや、街づくりの在り方も変化している現代社会において、最も大切なことであると思います。

下関においては長年にわたっての最大の課題とも言える、あるかぼーと開発が新たな市長のもとで動き出しました。今後、この街が一段次元の高い街へと進化していくためには、今こそ市民の叡智を結集し、文字通り「オール下関」で取り組んでいく必要があります。これを言葉で表すのは容易かもしれませんが、しかしながら、その実現に向けては幾多の困難が伴うものであると思います。



あるかぼーと開発イメージパース (下関市 HP より)



我が国初の招魂社 桜山神社 (上新地町)

多くの方が体験されていると思いますが、街づくりの議論はその方法についてそれぞれの考え方があり、時には激しい議論が交わされることも少なくありません。着地点を見出せない議論もあることでしょう。しかし、誰もが「ふるさと下関の発展のため」という大きな目標を共有しているはずで

その目標達成に向けて考え、共感し、時には議論することで、ブラッシュアップされた素晴らしいアイデアや手法が生まれ出されます。この過程を経なければ生まれることはないと言っても過言ではありません。

そしてそこには「将来のふるさとのあるべき姿」を常に思い描くことが根底になければなりません。自分たちの子供や孫、その先の世代にどのような街を残していくことができるのか。将来の成長に布石を打ち、そのために我々の世代がある意味では踏み台になるという覚悟も必要となってくると思います。

あるドラマにこのような台詞がありました。「亡くなった者に報いる方法は一つしかない。それは彼らがもう一度生まれて来たいと思う国にすることだ。」この言葉を思い出す度に、私は今の下関が先人たちに胸を張って素晴らしい街だと言えるだろうか、あなた方が守り、発展させて下さったこの街は、こんなに立派になりましたと堂々と言えるだろうか、自分の置かれている状況の中で最大限の努力ができていだろうかと自責の念に駆られます。しかし、そこを乗り越えていくことが私に課せられた責務でもあると認識しています。

街づくりに唯一の正解や、ここまでという終わりはありません。ふるさとのために何かしたい。その志を立てることから街づくりは始まります。新たな元号での新たな時代が始まろうとしている今こそ、みんなが愛するふるさと下関を次世代に引き継ぐために、下関21世紀協会の一員として積極的に行動して参ります。